

[第656回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 令和5年4月20日(木) 午後2時00分～3時00分

2. 開催場所 大阪放送 大会議室

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

出席の総数 6名

出席委員の氏名 成瀬 國晴 河内 厚郎
たつみ 都志 上林 寛和
徳 永 潔
鎌田 雅子(書面参加)

放送事業者側出席者の氏名

吉田 禎宏 赤松 加枝子
初田 実

4. 議題

1) 番組審議 『弁天町で30年～これからも、いつまでも～報道の30年』

2) その他

5. 議事の概要

議題1) 『弁天町で30年～これからも、いつまでも～報道の30年』について、
番組の企画意図と内容を説明し、意見を聞いた。

社 側 ラジオ大阪は今春、社屋を弁天町に移転し 30 周年を迎えました。それを記念し 3/21（火・春分の日）9:00～16:30 に「弁天町で 30 年～これからもいつまでも」と題した特別番組を放送致しました。番組ジャンルごとにゾーン分けして 30 年を振り返るスタイルを取り、14:30～15:30 は「報道の 30 年を振り返る」と題して過去 30 年、ラジオ大阪がお伝えしてきた主な事件や事故を藤川アナウンサーと当時取材に当たった記者 2 名で貴重な音源とともに 10 年刻みで振り返り、「このネット社会の中で、これからラジオの報道に何が出来るのか？ラジオだから出来る、伝わる報道とは？」を模索した時間でした。

委 員 <各委員のご意見>
今回この番組で印象に残ったのは、災害の瞬間にリアルに放送された音源だった。阪神淡路大震災発生の際は、番組に被せて配信されているのが生々しく、当時の恐怖感などが蘇った。東日本大震災の際は、原田さんのアナウンスがとても冷静で、突然の判断で注意喚起されていたのは、すごいと関心した。改めて過去を振り返ることで記憶が蘇り、記憶から忘れかける危機感をまた思い出させるきっかけになると、今回、30 年という節目でこのような振り返る特番ができ、節目節目に過去を振り返ることはとても大事なことだと思った。

委 員 この番組の構成がすごい所は当時の音源をそのまま使っていること。阪神淡路大震災のアナウンサーが伝えるときに、落ち着いていたが、緊張されていて、それが声のにじみ出していた。緊急性がとても伝わってくるので、そうあるべきだなと思った。番組を作られている方の責任感とリスナーからの信頼感は、テレビより優れている点だと思った。また、メインの 3 人の人選も良い。特に藤川さんが安本さんと吉村さんの解説を的確にまとめている。3 人のコンビネーションがピッタリだった。9 時～16 時半の生放送の中で 1 時間という短い時間だったが、濃く、自分自身の 30 年間も感じた時間だった。素晴らしい番組だった。

委 員 当時の音源はリアリティがあり、音と声の情報だけでも当時を鮮明に思い出すことができた。記者の現地ルポや中継が短くも、的確な言葉で伝えられていた。JR 福知山線脱線事故の取材で金属音や石をまき散らす音があったという目撃者からの情報や、安倍元首相の事件の爆発音や叫び声など、

音声だけで聞くと、テレビよりも生々しさがあったのが印象的だった。

委員 阪神淡路大震災の話の中で、関西での大地震を報道が想定・準備していなかったという安本さんのコメントは教訓として大切なメッセージだった。報道というのはメディアの社会に対しての使命だと思う。近頃のテレビはバラエティー番組が中心になっているが、報道はメディアの原点だと思う。これからもこういった事を取り組んでいただきたい。

委員 番組としてはラジオでしかできない良い番組。ニュースは即時性だけでなく、過去の出来事を遡ってなぞっていくやり方もあるんだと思った。ニュースと自分の記憶が紐づいて色々な事を思い出す。意義のある良い番組だった。今回のように過去の放送の録音データを使えばもっと色々な番組ができそうな気がする。

委員 最後にネット社会の事を語られていたのが自分にとっては勉強になった。AIの発達も目覚ましいが、パーソナリティの声に温かみがあり、それが伝わりやすいラジオは強みがあると感じた。テレビは色々な人の意見や映像があり、情報量が多いが、信ぴょう性など薄くなっていくと感じる。一番伝達力があるのはラジオだと吉村さんが言っていたが、本当にその通りだと思った。報道に携わったお二人の話に重みを感じたし、今後のメディアへの提言にもなっている。大きな意味のあった番組。

社側 貴重なご意見、ありがとうございました。

以上